英語　　東京工業大学　（前期）　1/3

＜全体分析＞

試験時間	90	分

解答形式

記述式と客観式の併用

分量・難易（前年比較）

分量（減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加）

難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

・2010 年度以降、「1,000 語を超える長文」が出題されるようになり、この傾向は定着している。ただし、長文２題の総語数は年度によって差があり、2014 年度から 2024 年度までの総語数は、「2,339→3,046→2,139→2,854→2,312→3,092→3,062→3,091→3,348→3,496（過去最多）→3,020」で推移しており、3,000 語を超えるのは６年連続となった。

・分量的な負担はかなり大きいといえるが、その負担を軽減するように、長文の内容は理解しやすく、設問も取り組みやすいものが増えてきている。2024 年度については、分量的な負担が減ったこと、さらに、和文英訳ならびに客観式の設問が例年よりも平易なものになったことから、「易化」したといえる。

・解答時間の目安は、大問Ⅰが 50 分程度、大問Ⅱが 40 分程度と思われ、3,000 語超の英文量をこの時間内で読みこなすにはかなりの速読力が要求される。

出題の特徴や昨年との変更点

・長年にわたって「大問２題」という構成が継続しており、２行程度の下線部和訳・英訳および内容説明が中心という設問形式に変動はない。「超長文」での出題に伴い、内容一致や空欄補充などの客観式設問の比重も高まっていたが、2024 年度については、大問Ⅱで（この大問としては新傾向の）「空欄補充問題」が出題され、例年のものより「軽めの設問」となったことで、その分だけ「和訳の分量」が増えている。

・内容説明２問は、大問Ⅰが「80 字以内」で、大問Ⅱが「70 字以内」でまとめるように指示されている（ちなみに、2023 年度は「70 字以内」と「60 字以内」／2022 年度は「70 字以内」と「80 字以内」／2021 年度と 2020 年度は「50 字以内」と「60 字以内」／2019 年度は「30 字以内」と「50 字以内」であった）。例年同様、該当箇所の的確な把握ならびに制限字数内にまとめる日本語の表現力が要求されるので、得点差がつきやすい。

・2020 年度から５年連続して、「本文中の５つの空欄に、一括して与えられた５つの文を埋める」という空欄補充問題が出題されている（2020 年度は１つの段落内での出題であったが、2021 年度以降は本文中の５つの段落に分散されている）。また、2024 年度では、大問Ⅱでも「本文中の４つの空欄に、一括して与えられた４つの語句（いずれも〈-ing 形〉ではじまるもの）を埋める」問題が出題されている。

・2023 年度の大問Ⅰでは「引用符内の表現が意味する内容」を問うものが２問出題されたが、2024 年度は新傾向の「タイトル選択」のほかに、「内容不一致」が出題されている。また、2023 年度の大問Ⅱでは「（イディオムや慣用表現を含む）下線部意味選択」が４問出題されたが、2024 年度は上述の「空欄補充問題」に変わった（2022 年度は「数字」を埋めるものが２問出題された）。

その他トピックス

・2021 年度以降、和文英訳は大問ごとに１問が出題されており、全体で「下線部和訳４問・和文英訳２問」となっている。なお、2024 年度については、和訳に比べ、英訳はかなり取り組みやすいものといえる。

・定番となっている最後の「内容一致」は、2023 年度に引き続き、大問Ⅰが「選択肢 10 から一致するものを３つ選ぶ」形式で、大問Ⅱは「選択肢８から一致するものを２つ選ぶ」形式である。

© 河合塾　2024 年

英語　　東京工業大学　（前期）　2/3

＜大問分析＞

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント（設問内容・答案作成上のポイントなど）	難易度
Ⅰ	読解総合	「細胞生物学に関する歴史と説明」 （1,824 words） 下線部和訳（２問） 和文英訳（１問） 内容説明（１問） 文補充（選択） タイトル（選択） 内容不一致（選択） 内容一致（選択）	・和訳：下線部(2)は文構造に従って素直に訳していけばよい。一方、下線部(1)は How impressive it seemed that …や enough to 以下の訳出にやや苦労する。 ・英訳：前半は定型表現で処理できるし、後半も強調構文で書けばよいので、文構造は組み立てやすい（「引き金になった」の訳出がポイントとなるが、trigger は大問Ⅱの１パラに名詞としてでてくる）。 ・内容説明：設問の指示が具体的でわかりやすく、該当箇所が直後の２文であることも明白なので、２つのポイントをバランスよく 80 字以内にまとめればよい。 ・文補充：代名詞などの「目印」となる表現がわかりやすく、埋めやすい。 ・タイトル選択（新傾向）：「細胞生物学」がテーマであることは明白であることから、選択肢は絞りやすい。なお、著者の Paul Nurse は生物学の世界的権威で、2001 年にノーベル生理学・医学賞を受賞している。 ・内容不一致：選択肢の主語がすべて cells で統一されており、テーマを絞った設問になっている。 ・内容一致：「不正解」の選択肢は判定しやすく、該当箇所を手際よく見つけられるかがポイントとなる。	やや易
Ⅱ	読解総合	「タスクを中断させる外的要因と内的要因」 （1,196 words） 下線部和訳（２問） 和文英訳（１問） 内容説明（１問） 語句補充（選択） 内容一致（選択）	・和訳：大問Ⅰ同様、構文は把握しやすい。下線部(1)は比較構文（as likely to A as to B）の理解が前提（be interrupted は和文英訳で「中断される」とある）。下線部(3)は２行を超える長さで、主節の SV 関係を正確に訳出することがポイントとなる（直訳でかまわないだろうが、意味が通る和訳になるようにしたい）。 ・英訳：文全体の構造（so ~ that …構文）が読み取れる答案に仕上げることが基本となるが、主節の内容は平易なので、前半部分の訳出がポイントといえる。 ・内容説明：文章の最終文に下線が引かれており、該当箇所を含め、求められている「理由」をどのようにまとめればよいかがわかりにくい（ので、この設問を解くのに時間をかけすぎないこと。「捨て問」と割り切ってほかの易しい設問に集中するのが得策である）。 ・語句補充（新傾向）：選択肢がすべて〈-ing 形〉ではじまるのが特徴といえるが、設問としては平易である。なお、空欄 A の直前にある e.g.は「for example の意」という注釈があり、空欄 C の直前にある like と似た働きであるし、空欄 B と D は while につづくという共通点がある。 ・内容一致：人名や地名といった固有名詞を手がかりにすれば該当箇所は見つけやすいし、「正解・不正解」の判定も容易である。	標準

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」
　　難易度は５段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

© 河合塾　2024 年

英語　　東京工業大学　(前期)　3/3

＜学習対策＞

・年度により、出題傾向に多少の変化はあるものの、「下線部和訳」「下線部英訳」「内容説明」が、出題における「三本柱」であることに変わりはないので、文脈を迅速かつ正確に把握しながら英文を読み進めていく練習を積んでおくことが不可欠である。
・「超長文」による出題が定着しており、空欄補充や内容一致などの客観式の設問の比重も高いといえる。例年、最後の内容一致には数多くの選択肢が用意されており、それぞれの内容を本文と照合していくのは面倒な作業ではあるが、選択肢が本文の内容理解を助けてくれるという側面もあるので、選択肢を“味方”につけながら読み進めていくとよいだろう。
・英作文については、基本例文を確実に覚えて、それを十分に使いこなせるまでに磨きをかけておくこと。例年、本文中に参考となる表現があるので、それらを参考にしつつ、ケアレスミスをしないように答案の作成には細心の注意と工夫が必要になる。

© 河合塾　2024 年